名著複刻

日本児童文学館

名著複刻 日本児童文学館 第一集
全32点 付録1 解説1

昭和四六年一月一〇日初刷発行
昭和五〇年一〇月一五日二刷発行

著者 代表 福田清人

発行 株式会社ほるぷ出版
東京都新宿区新宿二―一九―一三
代表 山浦喜三夫

印刷 東京連合印刷株式会社
東京都新宿区新宿二―一九―一三

© ほるぷ出版 1975 検印廃止

名著
複刻

日本児童文学館　解説

ほるぷ出版

『名著複刻日本児童文学館』の刊行にあたって

瀬沼茂樹
鳥越信
滑川道夫
福田清人
藤田圭雄

児童の魂に光を点じ、知性や夢や美や勇気を育てるすぐれた児童図書の価値は絶大である。そのことは、この世に多くの業績を残した人びとの回想に語られている。その意義を高く評価するわれわれは、ここに明治・大正・昭和三代にわたって、そうした役割りを果たしてきた名著を選んで、その複刻・刊行を意図したのである。

すなわち、児童文学の黎明期の巖谷小波から昭和戦中期の壺井栄に至るまで、広い視野から選び、文学史的に体系づけたのである。

それは童話はもちろん、少年少女小説、童謡、児童劇と、児童文学のすべてのジャンルにわたっている。未明、賢治、南吉、広介、譲治等の童話作家のほか、藤村、武郎、龍之介、春夫、弥生子等の作家の珠玉の童話に及んでいる。白秋、雨情、八十の愛誦すべき童謡集ももらさなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その内容は小学初年生から中学・高校生まで、段階的に読書対象となる名作であり、さらに最近その運動が盛んになってきた親子読書の絶好の適書ででもある。

またここには、たとえば龍之介の『蜘蛛の糸』、武郎の『一房の葡萄』、賢治の『風の又三郎』、南吉の『おぢいさんのランプ』等、教科書に引用・抜萃された作品の収録も多いので、学校教材としてもふさわしい。

竹久夢二、小穴隆一、初山滋、深沢省三、棟方志功等、一流画家の装幀本もあり、本自体愛蔵すべく、美しい夢を誘ってくれるであろう。

児童図書はその性質上、消耗されやすく、家庭のみならず、図書館にもほとんど保存されていない。殊にここに選んだすべての初版本は稀覯本に属するものが多いが、なかんづく『宝の蔵』、『海底軍艦』、『赤い船』、『ふるさと』、『十五夜お月さん』、『一房の葡萄』等、苦心してようやく、その原本を秘庫より探し求めえたもので、研究者にも益するところが大きいものである。

そして鑑賞手引のため、専門の研究者をほとんど総動員して、懇切でユニークな解説書を添え、加うるに、豊富な写真を配置し、楽しみつつ、三代の児童文学を展望する便を計ることにした。

名著複刻　日本児童文学館　目　次

〔児童文学展望〕
児童文学と近代文学　瀬沼　茂樹　三
近代児童文学の展開　明治　福田　清人　九
大正　滑川　道夫　一三
昭和　鳥越　信　二一
詩と童謡の歴史　藤田　圭雄　二七
〈子どもの本〉出版文化史　滑川　道夫　口絵
〔作品解説〕
〔明治期〕
尾崎紅葉『鬼桃太郎』　滑川　道夫　三五
巌谷小波『当世少年気質』　福田　清人　四〇
幸田露伴『宝の蔵』　塩田　良平　四五
押川春浪『海底軍艦』　上　笙一郎　五二
小川未明『赤い船』　福田　清人　五七

〔大正期〕

雪花山人『猿飛佐助』　尾崎　秀樹　六三
鈴木三重吉編『湖水の女』　桑原　三郎　六七
武者小路実篤『カチカチ山と花咲爺』　紅野　敏郎　七三
北原白秋『トンボの眼玉』　木俣　修　七七
山村暮鳥『ちるちる・みちる』　続橋　達雄　八二
島崎藤村『ふるさと』　瀬沼　茂樹　八七
野口雨情『十五夜お月さん』　藤田　圭雄　九二
秋田雨雀『太陽と花園』　塚原　亮一　九七
有島武郎『一房の葡萄』　瀬沼　茂樹　一〇二
浜田広介『大将の銅像』　滑川　道夫　一〇七
坪内逍遙『家庭用児童劇』（第一集）　冨田　博之　一一二
竹久夢二『あやとりかけとり』　浅見　淵　一一七
宇野浩二『赤い部屋』　渋川　驍　一二二
西条八十『西条八十童謡全集』　藤田　圭雄　一二七
江口渙『かみなりの子』　猪野　省三　一三二
佐藤春夫『蝗の大旅行』　岡田　純也　一三七

〔昭和期〕

芥川龍之介『三つの宝』　成瀬　正勝　一四二
千葉省三『トテ馬車』　向川　幹雄　一四七
酒井朝彦『木馬のゆめ』　関　英雄　一五二
櫻本楠郎『赤い旗』　菅　忠道　一五七
豊島与志雄『エミリアンの旅』　紅野　敏郎　一六二
坪田譲治『魔法』　鳥越　信　一六七
塚原健二郎『七階の子供たち』　大藤　幹夫　一七二
宮沢賢治『風の又三郎』　山室　静　一七七
野上弥生子『お話―小さき人たちへ―』　竹西　寛子　一八二
新美南吉『おぢいさんのランプ』　鳥越　信　一八七
壺井栄『夕顔の言葉』　横谷　輝　一九二

〔付録〕

文部省編『小学唱歌集』（初編）　藤田　圭雄　一九七
収録著者の児童図書目録　鳥越　信　二〇三
制作を終えて　鳥越　信　二一〇
復刻制作について　編集部　二一五

近代児童文学の展開

児童文学と近代文学　瀬沼茂樹

近代児童文学の展開　明治期　福田清人

大正期　滑川道夫

昭和期　鳥越　信

詩と童謡の歴史　藤田圭雄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

児童文学と近代文学

瀬沼茂樹

「児童文学」定義の諸問題

児童という言葉は、狭義では小学児童を指しているが、広義では未成年者一般に及ぼすことがある。しかし普通には、幼児期から少年期までを含む成人過程の年齢層、概していえば成人者にたいする年少者と解されている。もちろん、年少者は発育過程にあるに相違ないが、それぞれの過程に応じて独立した性格をもっていると考えられるから、幼児、幼年、児童、少年など、その特有の性格に応じて、独立した研究も可能であり、文学にせよ、たとえば幼年童話とか、少年小説とかの別が成立する。殊に文学の場合、少年後期、あるいは青年前期には一般の成人文学が愛用せられるのが普通となってくるので、児童文学の対象となる児童は幼児期から少年期までを包括し、必要に従い年齢層に応じて細分して考えられるとしてよいだろう。

児童文学は、綴り方とか自由詩とか児童自体が制作した文学を考えることも、できるにちがいない。文学という言葉は、広義には制作物（創作物）なのだから、児童の制作した文学を児童文学と呼んで、

いっこうにおかしいことはないはずである。しかし、普通に文学のジャンルとして児童文学を考える場合、児童のために成人が制作した文学、あるいは児童のための文学をいうことになっている。おそらくこれには二義があるだろう。簡単にいえば、児童用の文学であり、児童の年齢に応じて教育的意義を含めて、特別の配慮の加えられた文学が一方にある。もう一つは児童のために、純然たる芸術意欲から制作される文学である。現実には、前者にしろ芸術意識を根源としなければ、低次元の教化にとどまるであろうし、後者にしろまったく教化的適応性を無視しては児童文学として成立しがたいこともある。もちろん、純粋文学として児童を主人公とする文学があり、芸術意欲を少年の世界に藉りて大人の文学として書かれる場合もある。児童文学の見地から、これをも児童文学に含めて考えても、さしつかえはあるまい。一言に児童文学と呼んでも、細かに考えてゆくと、教育問題その他が介在して、さまざまに厄介な問題がおこってくる。

文学の問題として考えると、児童文学の分化が若いということであろう。どこの国の文学にも、神話、伝説、民話、民謡などがあり、それ自体に児童文学の要素を含みながら、児童文学として成立したわけではない。わが国のお伽噺にせよ、英語の Fairy tales, Fable にせよ、独語の Märchen にせよ、すべて児童のための文学として用意されたものではない。「童話」を「わらべのものがたり」としたのは滝沢馬琴の『燕石襍誌』が最初だといい、「お伽噺」を「昔噺」にたいして創作童話の意にもちいたのは巌谷小波だということである。古くから神仙譚、英雄譚、寓話（教訓譚）のような児童文学の素材とされる物語があっても、児童文学と目されたわけではなく、むしろ文学の発展、殊に近代文学の成立にともなって、文学のジャンルとして児童文学の分化と独立とがおこなわれ、児童文学として自覚され

たと考えて、大過あるまい。

近代児童文学の発生に問うもの

児童文学は初めから近代文学という自覚をもって生まれてきたわけではなく、また近代文学の立場からだけ解されぬ部分を含んでいる。巌谷小波はわが国のまぎれもない児童文学の開拓者ではあるが、その文学的自覚が近代意識に発し、児童文学がそういう文学的自覚にもとづいて生みだされたかといえば、大きな疑問が残る。たしかに小波は「文壇の少年家」であり、ドイツ語の Jugendschrift にならって少年用文学として「少年文学」、森鷗外の『稚物語』に先鞭をつけ、〈この可愛らしき詩形の家元〉となったにちがいない。これは硯友社文学のなかで、早くから少年物を訳出し、少年主人公の小説を多く書くといった本然の性向にもとづいており、そこからまたゲエテ、グリム、アネルセンと、外国の児童文学を愛好し、児童文学の集大成を企てることになった。

しかし近代文学の立場から小波の児童文学を考えれば、児童文学としてのジャンルの可能性を啓蒙し、東西古今の児童文学をわが国の児童のために集大成したにはちがいないが、近代文学としてこれを試みたわけではない。日本昔噺、日本お伽噺、世界お伽噺という三つの系列は、わが国で最初の童話文学の整理体系として偉大な業績であり、明治期に斯界に君臨するだけの実質をそなえたものである。しかしこれらはわが国の児童のために恰好の読物を提供しようとして用意されたものであり、勧懲主義といった狭い教訓主義、教育主義がないまでも、なお桃太郎主義といった特定の理想があり、近代文学という意識をそなえていなかったとしても、已むをえない。小波の児童文学が、近代文学という見地から

みれば、まるで別天地を形づくり、批評精神に欠け、文学的に幼稚と解釈されることもある所以である。あるいはこういうふうに批判することは酷にすぎるかもしれないが、反面からいえば、開拓者が万能でない限り負わなければならぬ受難といってよい。

文学における思想と技法の展開

児童文学は近代文学として味わわれるよりも、物語的関心が興味の中心となるといわれる。しかし物語的関心の中核となるプロットは、すでにそれ自身文学の思想であるから、やはり批判や思索がなくては独自の結実をもたらすことはできないはずである。主人公となる児童の性格や心理にしても、これを把握し表現するためには、これを鑑賞するよりも、明確な思想を前提とするものである。そこで、近代文学の発達による思想や技法や文体の進歩が、遅れて通俗文学の発達に採用されて進歩を促すように、近代文学と児童文学との関係を想定できるのではないかと思う。早くいえば、近代文学の発達が充分でなかったために、小波の児童文学も、近代文学の観点から考えれば、未熟であったのが当然ではないか、ということになる。

とにかく、児童文学は巌谷小波によって存在価値が明らかにされ、その分野も拡大されれば、その価値も向上され、不動の地歩をかためた。次の問題は内容の充実、芸術性の彫琢、さらには分化の進行などによって、児童文学が清新且つ豊富になるとともに、絶えざる研究と更新とが加えられることであろう。実際に大正・昭和に入って、児童文学の革新と興隆とがすすめられ、みごとに結実していったことは、後に詳説されるとおりである。

近代作家たちの児童文学へのかかわり方

近代作家は、児童文学の歴史のなかで、また有力な担い手であり、たしかに重要な部分を形成している。児童問題に大きな関心をもち、少年少女のために蔵書を解放したり、児童読物として『心に太陽を持て』を著したりしたけれども、みずから児童文学を書こうとはしなかった山本有三のような作家がいる。しかし『路傍の石』のように、少年のための文学として制作されたわけではなくても、主人公愛川吾一の成長に即した教養小説として、同様な『真実一路』などとともに、児童に愛読されている。国語問題についての見識をもち、児童にも親しみやすい文体を採っていることが大きな役をはたしている。

概していえば、鈴木三重吉、島崎藤村、あるいは有島武郎のように、子供が成長するにつれて、自己の少年期を思い起こし、自己の体験を語るという形で、少年主人公の小説が書かれる。鈴木三重吉の童話の革新が自分の子供に童話を与えようとして、拙劣なのにあきれたことに動機があり、島崎藤村が子供の成長に対比して少年期の追憶を語るところに少年読物を思いたち、有島武郎が子供の心をそのものとして把握しようとして、児童文学を残すなど、動機に微妙な差異がみられるにせよ、彼らがそれぞれに特異な作品を生みだした所以は明らかである。中勘助にしても、また芥川龍之介にしても、この意味で幼少年期の追憶が若干の仮構を混えてつくられているし、谷崎潤一郎のように、幼少年期の特異の精神物理現象に興味をもって、唯美的作品ともしている。

立志小説として少年文学を書いた国木田独歩は、ワアズワス風に自然の神秘を直接に感得する〈幼児の心〉を大切にし、そこに神秘的浪漫主義を用意し、暗い北国育ちの心性として、自ら明るい南国に憧憬するところから生まれた小川未明が浪漫的詩情から児童文学を生んでいる。最も純粋な詩的なものは

メルヒェンであるといったノヴァリスのように、メルヒェンに純粋なファンタジの働きをみるとすれば、泉鏡花から小川未明、鈴木三重吉をへて、広汎な想像力の発展に、メルヒェンの成立する所以も納得せられるに相違ない。追憶または回想による児童文学の他に、童話または寓話として現れる純然たる想像的構想力の働きに留意しておきたいと思う。

しかし多くの近代作家の児童文学は、山本有三の『路傍の石』のような精神的遍歴または人間形成の過程をたどる立志小説または青春小説である場合が少なくない。堀辰雄、太宰治、伊藤整、中野重治らの作品のうちにみいだされる。反対に子供の世界を対象として取上げているかにみえながら、逆にその背景となっている大人の世界を描くことに関心をもっている作品がある。坪田譲治、林芙美子、庄野潤三らの作品のうちには、児童文学の形相をとりながら、実は大人の文学というべきものが書かれている。

児童文学の問題は極めて複雑多岐に亘っていてむつかしい。児童の心理学や教育学などの問題が一方にあり、また民話・民謡のように伝統の問題が他方にあり、その中に近代文学そのものの要求が働いている。児童文学の近代文学に占める位置を考えるにせよ、考慮すべきことがあまりに多いので、ここでは僅かにその一斑にふれるにとどめなければならなかった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com